

# 協議会ニュース

61号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1997. 3

やっと顔を出した雄花

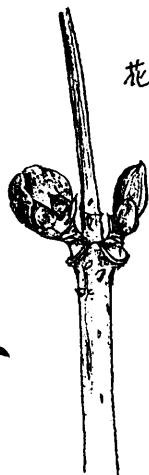
オオバヤブシ  
(カバノキ科)



なんど見ても面白い  
オオカメノキ  
(スイカズラ科)



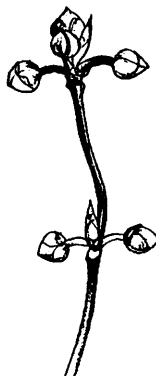
花と葉が仲よく一緒に  
ニワトコ (スイカズラ科)



ピピカ餅のソメイヨシノ  
(バラ科)



いまにも踊り出しそうな  
シロモジ (クスノキ科)



土の上で花が  
開き、それから茎  
が伸びはじめる  
フクジュソウ  
(キンポウゲ科)

芽鱗が途中で  
横にはじける。  
ヤマボウシ (ミズギ科)



← 高い枝先に何か引ッ  
かかっているかとよく  
見れば...

芽鱗につつまれた雄花



春の息吹きが見えて来ました。  
1月の観察ノートから、1/27~30(5)

## 近年増加著しいチョウ・トンボのこと

安 藤 尚 (顧問)

愛知県内での、ここ10年位の昆虫の発生状況をみると、ある種の昆虫では明らかに増加傾向が認められます。自然環境の急激な変貌で個体数を減らしている種類が多いなかであって、その原因が何であれ、増えている種類がいることは興味深いことです。

### (1) ツマグロヒョウモン (タテハチョウ科)

増えているチョウを1種挙げるとすれば、このチョウです。チョウとしては中型で翅を開くと65mm位、橙色の地に黒い斑点の豹紋模様は、その気になれば「あっ、これか」と、すぐ見分けられるチョウです。雌は、翅端が黒く(ツマグロの由来)すぐ分かります。雄は、他のヒョウモンチョウ類に似ていますが、迅速で直線的な飛び方をするので、慣れれば飛んでいるものでも区別できます。

晩夏から秋にかけて見る事が多く、セイタカアワダチソウやキダチコンギクで吸蜜したりしています。幼虫の食餌植物はスミレ類でマスマシレやパンジーを好んで食べます。

暖地性のチョウで、この地方では、以前は稀な種類で、野外で見つけようものなら、必死になって追いかけて採集したものです。それが1990年代に入ると間もなく普通のチョウになってしまいました。名古屋の市街地にも飛んでいるし、スミレを食べている幼虫も見られます。近年、日本列島全体でも、ナガサキアゲハ・サツマジミなど北方へ分布を拡大しているチョウがいくつかありますが、ツマグロヒョウモンもそのうちの一つです。

ツマグロヒョウモンが増えたのは、暖冬の影響や家庭のプランター・公園花壇などに植栽されることが多くなったパンジーが原因の一つかもしれない。しかし、春の成虫は非常に少なく秋の比ではありません。冬越しする幼虫も見

つっていますが、多分冬の寒さで多くの幼虫が死んでしまうからと考えられています。幼虫が蛹の耐寒性の獲得と暖冬傾向継続の如何が、これからのツマグロヒョウモン増加の鍵を握っているものと思います。

### (2) ノシメトンボ (トンボ科)

アカトンボの1種です。翅の先端が黒褐色のトンボで、アカトンボのなかでは大きい方の種類です。

10年位前から増加が目立つようになりました。もともと北海道から九州まで広く分布している種類で、ツマグロヒョウモンのように分布圏が広がったという類の増加ではありません。環境などの変化がノシメトンボを増やしているようです。

ノシメトンボの幼虫は池沼や水田に住んでいます。このトンボの産卵行動は一寸変わっていて、雌雄連結して水生植物の繁茂している上を飛びながらパラパラと卵を産み落とします。水田への産卵は、植物(イネ)の繁茂している稲刈り前の時期に限られます。秋には、池の水は少ないし、水田も水は落とされていますが、水の有無に関係なく卵を落としていきます。翌春、その場所に水を張ることを知っているかのようです。

このノシメトンボの最近の増加は、水田で使われる農薬と関係があるように思われます。かつて、強い農薬が大量に使われて減っていった水田のトンボが、農薬の量や質の変化で復活してきたものと思われます。山からの清冽な水で灌漑されている山間の水田での復活が著しいのは、そのことを示唆しているように思います。

この頃、一宮市の市街地にある拙宅の小さな庭にも、たまにですが、ノシメトンボが姿を見せるようになりました。

## 風の丘の植物盗掘記

相地 満 (風の会)

## 1 はじめに

私が「風の丘」と名付けた丘陵地に入ってから5年が過ぎた。特に95年10月、丘陵に抱かれた静かなため池の畔で、絶滅危惧植物（危急種）に指定されているイヌセンブリの小群落を見つけてからは、頻繁に足を運ぶようになった。以後14か月間に22回のフィールドワークを重ねた。その間に私は、この人知らざる丘陵地が、いかに多くの生き物を育てており、そして危機的な状況にあるのかを身に染みて感じてきた。この地を何とかしたい。この地の自然の仕組みや有様を見つめ続けることで、私たちは多くの教育的な、あるいは文化的な遺産としての価値を身に付けていくことができるのではないかと思ひ続けた。しかし、聞くところによると「風の丘」は、2分の1から3分の1がパイロット事業によって削り取られるという。すでにもう子細な測量も終わり、その実行は、間近である。

この丘の頂に立てば広く海が見える。丘から海にいたるなだらかな起伏の上には、つい先頃まで、自然の森（二次林）や鎮守の森があった。点在する大小のため池や変化に富む耕作地には鳥が群れ、大地は美しいモザイク模様を作っていた。人々は海沿いを通る古い街道とくぼ地のように入り組んだ港の周りにそれぞれが村を作り、暮らしを営んできた。そんな様子がありありと眺められた。だが今、そのほとんどの部分がパイロット事業により均一化された平地となっている。積年の生き物の営みや人々の手による豊かな表土は、無残にもはぎ取られ、白ちゃけた大地と化している。目の前に横たわる不毛の地の成立をだれが望んだのであろうか。その事業の最後の締めくくりとしてこの丘が削り取られるのだという。

パイロット事業の由来や効果について私は知らない。だがこの丘の2分の1も削り取ってしまえば、そこに生きる生き物たちに壊滅的な打撃が加えられるのは必至である。特に谷頭部から細長く伸びる谷地田やその斜面の開削が行われれば、森の乾燥化が進み、生き物たちはひとつたりもない。毎年春、谷地田に大量に産み落とされる両生類の卵から孵化した幼生は、水生生物の格好の栄養源となっているし、そこに保水された水は、さらに多くの生き物たちの生を支えている。この丘の森にこれ以上手が加えられれば、動物食のフクロウやタカも営巣できなくなるだろう。ハンノ

キ林が伐採されれば、  
そこに多産するミドリ  
シジミは成育できなく  
なる。丘の崩壊地にで  
きた湿地に生える周伊  
勢湾要素の植物群や湿



地固有の植物は、どうなるのだろうか。イヌセンブリは、イシモチソウは…。おそらく数年を待たずしてこの地から姿を消して行くにちがいない。

96年12月26日(木) これまで何度も行こうと思っていたが、結局そこに至る道が見つからず、行けず仕舞いになっていた池にたどりついた。細長く小さな集水域には、かなり古い時代の耕作地があったらしく、そこが見事なハンノキ林になっている。池に近づくとき野鳥たちのワンダーランドである。とにかくうぐいす色をした鳥が多い。メジロ・シロハラ・アオジ・ウグイスと飛び交う。良く分からなかったがキビタキのメスらしいものもいた。静かで小さく、まるで森の中の日だまりのようになった池である。(1月4日にはウソもきていた。)野鳥の

調査にもってこいの場所だと思いつつ、草をわけて池のほとりに立つと小さな穴が幾つもあいていた。何の穴かと思いつめてみたが、良く分からなかった。やがてそれが、散弾によるものだということが分かる。小さな池の周りに「LEMMINGTON」等と書かれた葉きょうがいくつも散乱している。(1月4日数えてみると15も有り、そのうち未使用のものが1あった。) 林の脇にある犬の糞の意味もそれで分かった。猟をするものがあるのだ。帰宅して、「愛知県鳥獣保護区等位置図」を見ると、そこは禁猟区である。だが、密猟をするものがあるのだ。これもまた「風の丘」を脅かすものとなっている。何故ならば、ここには、たくさんの野鳥のほかに、タヌキもイタチもノウサギもいるからだ。密猟だけではない。植物の盗掘も激しい。

「風の丘」には古窯跡がある。その一部が発掘され、詳しい報告書が出ている。発掘場所は、自然にできる崩壊地に似ていて、樹木や表土が剥ぎ取られ、やがてそこが湿地化していく様子が見えかわれる。まず初めに出てくるのはアリノトウグサやコモウセンゴケである。発掘年度が分かっているだけにそれらの湿地性植物群落の広がりや年次変化を正確に記録していくことができる。95年10月に見つけたパイオニアとしてのコモウセンゴケ群落が、96年には確かに崩壊地中心部に向かって広がりをを見せていた。そこで12月26日に再度位置を確かめ、1月4日にコドラート調査をしようとでかけたところ、その小さな初期群落は見事に剥ぎ採られていた。周辺に広がった1~2年生のものも発掘現場を利用したマウンテンバイクの轍の跡に著しく掻き乱され、さんさんたる状況になっていた。

自然を破壊し、生き物の絶滅を速めていくものは、何もパイロット事業や大規模な開発だけではない。自然に親しもうとする人々の根源的な欲求の、そのあり方もまた、草の根的な自然破壊の役割を見事に果たしている。密猟、盗掘、

誤った薬草・山菜趣味、空虚で刹那的なアウトドアブームの中で里山の自然はかってない打撃を受けている。人と自然のあり方を今こそメンタルな方向に問いなおし、新たな循環と共生の社会を実現・構築していく努力を私たちはなんとしても続けていかねばならない。それを可能にしていく理想的な背景を産み出していけるのは、地味で身近な自然の観察である。その営みはまた、消えゆく里山の自然とそこに長らく生き続けてきたたくさんの生き物たちへのレクイエム(鎮魂の歌)を歌い続けていくことになるのかもしれない。

そういう思いを込めて、しばらくの間「風の丘」で見たこと、考えたことを書いてみたい。

## 2 「風の丘」の植物盗掘記録

私が最初に「風の丘」に足を運んだのは1992年7月のことであった。丘陵の崩壊地にできた湿地を訪れた時であるが、そこへ至る道すがら2本のササユリを見つけた。二次林の中を通り抜ける小径の脇に、懐かしい芳香を漂わせて2つの花がひっそりと咲いていた。すぐ手前の林の中にできた空き地には、大きなオニユリが花を咲かせ、豊富な花粉をまき散らせていたので、二重の驚きであった。私が最初にオニユリを見たのは小学校の6年生か中学校の1・2年生の時のことである。三重県の町屋川の支流にシラハエを釣りに行った。土手の脇に咲くオニユリの大きさに圧倒されたものだった。二度目は、それから十数年たち小学校を卒業した子ども達が自宅を尋ねてきた時、庭に咲いていたからといって、一抱えもあるオニユリを持ってきたことである。衣服に花粉が付くと取れないからと言って、それは丁寧に包んであった。三度目はそれから数年たち、内海の山中を歩いていたときであった。海の見える日当たりのよい場所に芽を出したオニユリが数株あった。



案内してくれた人が「ユリと見れば食えると言ってみんな掘っていくのだ。」と言っていた。山菜趣味のはしりの頃である。「そういうのはたいがいばあさんである。」とも言っていた。確かにそのオニユリの周辺にはまざまざとした採掘の跡があった。

久しぶりのオニユリに何か感慨深いものを感じていた矢先のことである。今度はササユリ。知多で見るのは初めてであった。こんなところに残っていたのか。このユリも思い出深い。私が小学校の高学年の頃から良く出かけた岡崎市竜泉寺周辺の森には、もうこのユリはない。

その日はカメラを持っていなかったのも、後日、写真を撮りに出かけた。だがオニユリもササユリももうそこにはなかった。

「あの人たちだ。」私はとっさにそう思った。というのもその日、多くの友人たち（68名）が私の引率のもとにその径を通して湿地に出かけた。彼らがそんなことをするはずはない。しかし友人たちに混じって見知らぬ婦人が3人、普段着のままで行っていたのである。私は変だなと思いつつ、友人の知人が家族なのだろうと思い込んでいた。だがどうやら違うということが終わりがけに分りかけてきた。友人たちを引率するために第一集合場所にしていた公民館ではその日、たまたま山草展がひらかれていた。その山草展とは、なんとネジバナの山草展である。ネジバナは確かにラン科の植物には違いないが、こんなものにまで山草採りの手が及んでいるのだ。それを見にきた人たちがこっそり混じり込んでいたのである。集合場所でひとしきり湿地植物の説明をしているとき、3人の婦人が、遠巻きにしながら熱心に聞いていた。そしてここまでついてきたのである。オニユリの前で、「こりゃあユリ根が食べられる。」と言っていたのを思い出す。そして私の友人たちがアカガエルの小さなものやら美しい目をしたカトリヤンマを追いつけている最中、じっとササユリを囲んで立っていた。確かに彼女たちが翌日にでもまた来て、採っていったに違いない。

私は腹立たしい思いで一杯になった。百合根がどんなに滋養のあるものであっても、あの人たちの腹の中に納まったのかと思うと臭い糞にしかならなかったのではないかと思う。それによって幾許の命が伸びたのであろう。そういうものを食べて何になるというのだろうか。食糧難の時代でもあるまいし、食用野菜なら何時でも手に入る。百合根も栽培されたものがいくらでも売りに出されている。返す返すも残念に思った。ササユリは狭い庭にでも植えられたのであろうか。どうせ1年と持たないであろう。一体それが何の慰めになるというのであろう。庭に植える植物なら園芸品店に山ほどあるではないか。

このように私は、この地の自然に感銘を受け、豊かさに驚くと同時に、盗掘という人の仕業の罪悪をまざまざと見せつけられたのである。それから5年、オニユリもササユリもこの地から再び見出すことはできない。

（表1）は顕著な盗掘を受けた植物の記録である。もちろん私が偶然確認した以外にもたくさんの植物が持ち出されているのだろう。この丘に魅かれた老人たちが、善意で整備している素朴な公園に植栽された花の苗や樹木ですら掘り採られていくという状況が続いている。

（表2）は、数を減らしていることが明らかな植物の一覧である。これらの植物を不用意な踏み付けや盗掘から守る術はないだろうか。私は、ささやかではあるが、小さな立看板を湿地入口に立てることにした。そこは、盗掘目的の人しか目にするのでない場所である。

#### 植物を持ち出そうとする方へ

ここに成育する植物は、ここでき育つことができません。これ以上持ち出すことのないように強くお願いいたします。あなたがこの地から植物を持ち出したことが摘発された場合、法による刑罰が課せられます。販売、あるいは栽培の事実がある場合も同様です。そのことを充分お知りおきください。

付記

(1) 盗掘の理由

盗掘の理由は主に園芸目的と薬用・食用目的が考えられる。95年10月に目撃したホソバノリンドウの大量持ち出しは、花期に根塊のみ持ち出されたところを見ると薬用と思われる。また、いたるところにヤマイモを掘った穴がある。これらは食用である。コモウセンゴケなどの場合は育苗箱を何箱も持ち込み、そこにびっしりと敷き詰めていく。何にするのかと問えば庭に池を作ったのでその周りに植えるのだという。イワショウブなどは専門の販売業者がいる

(2) その他、今注目している植物

以下の植物は、「風の丘」で注目している植物のごく一部である。これらの植物もまた知らぬ間に、盗掘の憂き目にあっているのかも知れない。

オケラ・イヌセンブリ・イシモチソウ・コクラ  
ン・コケオトギリ・サウトウガラシ・ショウ  
ジョウバカマ・ミヤコグサ・クロミノニシゴリ・  
タツナミソウ・ヒメハギ・アリノトウグサ・ス  
ミレの仲間・・・

1997. 1. 5 (日)

(表1) 盗掘の著しい植物と盗掘の記録

1997・1相地

No	種 名	92	93	94	95	96	明確な盗掘記録と状況
1	ササユリ	・	×	×	×	×	92・7盗掘以後全く見られず
2	オニユリ	・	×	×	×	×	92・7 ”
3	ハルリンドウ	—	—	—	—	△	92年以前の盗掘で激減 96年再見
4	モウセンゴケ	◎	◎	○	○	△	常時盗掘の模様 盗掘跡見つけ難い
5	トウカイコモウセンゴケ	◎	◎	○	○	○	”
6	コモウセンゴケ	◎	○	○	○	△	” 特に被害大 盗掘跡多し
7	イワショウブ	◎	○	△	△	△	92・9大量持出し 常時盗掘跡多し
8	ミズギボウシ	○	○	△	・	・	95・8絶滅が危惧されたが96年に2本
9	ミズギク	○	△	△	△	・	93・7/95・8/96・9(8月 8本有 9月無し)
10	サワシロギク	◎	△	△	・	・	93・9/94・9/95・9 95年から殆ど無い
11	ホソバノリンドウ	○	○	○	○	・	95・10 大量持出し 96/11 細い物6本
12	ハリミズゴケ	◎	○	△	△	△	95・8/95・10/96・12それ以外に常時

×絶滅 ・極わずか △少ない ○散見 ◎良好 —不明 00・0/0は盗掘された年月

(表1)は湿地と湿地周辺の植物に限っているが、その他に丘陵尾根のミツバツツジ・ヤマツツジもかなりの盗掘を受けている。また、湿地内のツゲの持ち出しが 96/12に確認された。ため池周辺のコモウセンゴケも 95/10と97/1に大量に持ち出された。特に 95/10には、育苗箱2箱にぎっしりと持ち出された。露呈される顕著な盗掘以外にも常時何らかの形で様々な植物が持ち出されていると思われる。

(表2) 湿地と湿地周辺における植物の絶滅・消滅の度合い

1997・1相地

No	種 名	階級	主な原因	92	93	94	95	96	成育場所
1	シラタマホシクサ	3	遷移	◎	◎	○	△	○	湿地内
2	ミミカキグサ	3	踏み付け	◎	◎	○	○	○	〃
3	ムラサキミミカキグサ	5	踏み付け	○	○	△	・	・	〃
4	ホザキノミミカキグサ	4	踏み付け	◎	◎	△	△	△	〃
5	モウセンゴケ	4	盗掘	◎	◎	○	○	△	〃
6	トウカイコモウセンゴケ	4	盗掘	◎	◎	○	○	○	〃
7	コモウセンゴケ	3	盗掘	◎	○	○	○	○	湿地内外
8	イワショウブ	4	盗掘	◎	○	△	△	△	湿地内
9	ミズギボウシ	5	盗掘	○	○	△	・	・	〃
10	ミズギク	5	盗掘	○	△	△	△	・	〃
11	サワシロギク	5	盗掘	◎	△	△	・	・	〃
12	ホソバノリンドウ	5	盗掘	○	○	○	○	・	〃
13	ハリミズゴケ	4	盗掘	◎	○	△	△	△	〃
14	ハルリンドウ	4	(盗掘)	—	—	—	—	△	〃
15	アリノトウグサ	4	踏み付け	○	○	△	△	△	〃
16	ショウジョウバカマ	4	盗掘	—	—	—	—	・	〃
17	ササユリ	5	盗掘	・	×	×	×	×	湿地周辺
18	オニユリ	5	盗掘	・	×	×	×	×	〃
19	ツゲ	3	盗掘	—	—	—	—	○	湿地内
20	ミツバツツジ	3	盗掘	—	—	—	—	○	湿地周辺
21	ヤマツツジ	4	盗掘	—	—	—	—	△	〃

消滅度を表す階級値／3 存続が維持できそう，4 かなり際どい，5 危機的な状況

年度ごとの状況は、(表1)に同じ。湿地の植物は、遷移により自然に変化をしていく。しかしそれ以前の人為による被害や影響は、はなはだ大きいことがこの表をみれば、良く分かる。ハルリンドウの盗掘は、故人からの聞き取りによる。ショウジョウバカマもその可能性が大である。



## 近畿・東海自然観察指導員

### 連絡会の交流会に出席して

青木 雅夫 (名古屋支部)

冬晴れの暖かい1月11日(土)～12日(日)の2日間、京都御池の本能時会館で開かれました。愛知県からは、佐藤、篠田、鬼頭さんと小生の4名で、佐藤さんはキャリアを買われて進行を務められました。

出席者はNACS-Jから吉田普及部長、滋賀県の村上、平松さん、奈良県の垣井さん、京都は地元だけに西川さんほか多数が参加しました。それに神奈川県からオブザーバーとして金田さんの全部で21名で賑やかに進められました。

はじめに吉田さんから、NACS-Jの現況について話があり、その中で、地域に密着した観察会からさらなる展開のために、自然保護と観察会の関係。NACS-Jの会員の中で指導員が半分を占めるようになったが、一般の会員は会報以外に指導員＝観察会とのつながりもなく、目的を失って2～3年で退会してしまう現象が起きている。会員増強のために新しくポスター・パンフレット・スタンドなどを用意してあるので申し込んで欲しい。などのほか、会員が少ないことによる運営の苦しさ、のすこし気にかかる内容でした。

この後、滋賀県の平松さんから順に活動報告に移り、愛知県まで興味深い内容を資料をそろえて熱心に報告されました。休憩をはさんで自由討議になり、活発な意見が延々深夜の1時近くまで続けられました。

内容は、種々雑多でとても紹介しきれませんが、全体の印象としては、地域性や環境の違いはあるが、皆さんに共通していることは、自然観察は楽しいからと、そして少しでも自然保護に役立ちたいという真摯な気持ちが感じられました。会報についてもそれぞれ個性があり、これぞ手づくりといったものばかりでした。

議題とは別件ですが、一部の連絡会で運営方法で意見の相違があるようで、せっかくの機会にすべての府県が出席されなかったのは残念でした。

翌日は、朝の白川、祇園、智恵院から清水までの街中散策で、人気のない芸妓置屋の静まり返った雰囲気はまことに不思議なもので、夢の中を歩いているような錯覚におちいつたりしました。これも自然観察なのだと考えつつ。

終わりに交流会の収穫はなんといっても普段と違うフィールドで観察している人達から生の情報が聞けること、共通の目的を持っている人間同士なので初対面とは思えず、ごく普通に話ができたとなどで、“交流会は楽しい”でした。



### 「交流会の概要について」

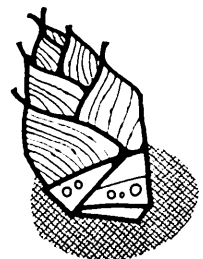
(事務局)

#### 【各県の活動状況等】

〔NACS-J吉田部長〕

指導員制度は発足以来19年目になり、指導員数も13,000人余りとなった。48地域に連絡会ができている。NACS-Jの会員の半分近くが指導員となっているが、指導員以外の会員の定着率がよくないという問題もある。

連絡会の活動は様々であるが、NACS-Jが行う全国調査などでもっと指導員に呼びかけてもらうなどの協力も期待したい。保護活動は





小人数でもできるため、そうした活動の方が名前を知られて、連絡会の知名度が上がらないということもある。

〔滋賀県〕

県にエコライフ課ができて、そこが環境ボランティア交流会などを行っている。連絡会では参加型の行事を目指して活動している。また、県や団体の受託行事が多いのも特徴である。

〔奈良県〕

会員は30名程度。8年度には大阪府と合同観察会を行った。

〔兵庫県〕

会員は58名。各活動団体とネットワーク化したいと思っており、相互の情報交換から始めている。他に自然教室もあり、連絡会自体は自然観察会を行っていない。

〔愛知県〕

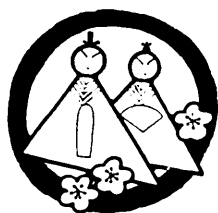
会員は400名余りいる。最近、定例観察会が増えているのが特徴で、連絡会が関係する観察会は年間160回ほどになる。県内の情勢としては、湿原の保護が問題となっており、市町村などで土地を買って保護する事例もみられる。しかし、遷移にどう対応するか、盗掘などに対する保全策、一般の人にどのように見せるかなど管理上のノウハウができていない。こうしたことは里山の保護などにもつながる問題でもある。

〔京都府〕

会員は100名程度。会員がみんなで一つの観察会を作り上げるような活動をしている。スタッフも楽しめる観察会にしていきたいと思っている。

〔金田(東京)〕

指導員の講習会で、指導員は何をすべきかは講義されるが、連絡会が何をすべきかが示されていない。なぜ連絡会があるかを考えてみると、行政との協調、ネットワークとしての意味、講習会のフォローなどが考えられる。



## 《意見交換から》

- ・ 滋賀県の連絡会では、近自然工法シンポジウムを大学の先生とネットで企画した。(全国規模。参加者 200名) 連絡会の設立の始めから行政とつながってきたので、そうした動きが根底にある。連絡会がいろいろな手法を考えることはできないが、機会を設けて、行政などに提案する役目は果たせると思う。
- ・ 行政を利用することはいいが、その手先となることは避けたほうがいいのではないか。
- ・ 観察会は遊びではなく、保護につながるものでなくてはならないが、行政に向かう力はなかなか持てないと思う。
- ・ 行政が今まで持っていた権威のある人の意見しか聞かないという風潮が最近では変わってきており、市民の声も声も聞こうという動きが出てきている。行政のパートナーになるということも大切な活動である。
- ・ 連絡会の出発からの経緯や流れが違うから、それぞれ違った対応があるのではないか。保護運動を嫌う社会情勢もあるから無理強いはいできない。個人的には、普及と保護を両輪としていくことが必要と考える。
- ・ 自然観察は運動体になってはいけないということはない。具体的な保護活動もしなくてはいけないのではないか。
- ・ 保護運動に関しては、動ける人とそうでない人がある。各県の連絡会にそれを調整する力があるとよい。活動にはよりどころが欲しいものである。
- ・ 保護運動は両刃の剣でもあり、それを行う団体を変えてしまうこともある。それほど勢力を使うものであることを知ったうえで活動に取り組むべきである。
- ・ ネットワークにより、団体の特徴を生かしてことに当る方法もある。ただ、ネットワーク作りはそんなに大変ではないが、その中でイニシアチブをとれる団体になる必要がある。
- ・ 運動体としての意識を養う必要もある。
- ・ 京都は、保護運動はしていない。県から委

託を受けているからではなく、保護運動をすれば会に影響するのを恐れるから。ただ、会員には保護運動に熱心な人もいる。

- 自然観察から始まる自然保護ではなく、その逆でなければいけないのではないかな。
- 高齢者に自然保護を言っても仕方がないという意見があったがどうだろうか。
- それぞれの年齢層に、それぞれの役割があるので、例えば子供だけ対象にすればよいというものではない。
- 保護運動のネットワークが欲しいと思っていたが、保護運動だけでは限界がある。本当に自然が好きだという意識を持っていないと駄目ではないかと考えた。そこで自然観察会を知って、それに参加するようになった。しかし、今になった見ると、ちょっと違うのではないかと思えてきた。自然と自分の関係を考えるという原点にもう一度戻って考えたいと思っている。
- 自然観察会は底辺を広げるものというが、観察会だけでは話したらおしまい、それをフォローする必要がある。それを引き受けるのはNACS-Jではないか。みんなが思うだけでは力にならない。その集約の場が身近にあることが大切である。
- あまりシャカリキにならないでいようと思う。自然のことを強く思う人を生み出すネットワーク作りをしていくことで、そこからやれる人がやる体制も出てくるのではないかな。
- 底辺を広げても、それを誰かが集約する必要はないではないか。自ずと何かが出てくるものだ。
- まず楽しむための観察会を行っている。それが指導員の第一の役目ではないかと思う。また、情報をうまくつなぐのも大切と思う。
- 今の自分が楽しむだけでは駄目ではないか。植物園のガイドとして教える観察会をしているが、いろいろ自分で学び考えていくのは、しんどいけれど楽しいものである。
- 反対運動を行う場合には、地元運動母体を作って、指導員は表にでないで指導する方

法がある。愛知県では、そうした実例もある。そのためには、日頃地元とつながりのある活動をしていることが大切である。

- 行政にもの言える人を育てる。ナショナルトラストも連絡会が主催するのではなく、人を集めるまでを行えばよいではないか。
- 行政にもの申すことができる人と観察会で指導する人がうまく釣り合っていれば理想的だが。
- 京都では、意識は持っているが、保護を直接のねらいとした観察会は行っていない。しかし、それでも自然保護につながる効果は有るものと思っている。
- 地元の自然を大切にす意味から、地元の人の参加を期待したい。
- 山奥に住んでいるので、地元では列島改造みたいなことが大切にされ、自然観察会しても人は来ない。行政もそうしたことには興味がない。最近やっと観察会をやろうという気になった。大事にしたい自然ということを出舎の人にわかってもらうにはどうしたらよいだろうか。
- 子供の生活の仕方が変わっているの、自然に接することがなくなっている。とにかく意図的に子供や大人を自然の中に連れ出したい。
- 出舎で自然の大切さを伝えるには、都会と違った切れ口が必要である。しかし、観察会はず底辺を広げることで、そこに自信を持って欲しい。
- レベル差があってできないこともある。高度なこと必要かもしれないが、自分か楽しいと思うことをしていけば良いではないか。そこで生まれた指導員が次につなげていくと思う。
- 開発されてしまった所を見て、いろいろな角度から比較する方法もある。
- 出舎の場合でも、そこでやった観察会の結果を地元の人に役場の広報紙などで伝えるとよい。そこに今の自然の状況なども書いたりすればさらに効果的である。

「定光寺にはすてきな自然がいっぱいあります。見に来て下さい。」

定光寺は、数年前まで尾張支部でよく観察会をやった場所です。私が指導員になった頃は、委託観察会に向け紙芝居を使おうとか、ここで何を話そうとか、何度も下見をして打ち合わせた場所でもあります。でも、数年後には、だんだん飽きてきたのか参加者が少なくなりました。そこで、バラエティーに富んだ場所で観察会をすることになりました。だんだん欲が出て、もっと遠くにも行きたいという声が出ました。特別観察会が誕生したのです。支部が計画する観察会は、会員の研修の場だったんです。会員が、色々な植物や昆虫の名前を覚えるのも目的のひとつでした。観察会のリーダー養成の場の試みもなかった訳ではありません。あるにはあったのですが、自分も含め力量不足でそういったことに消極的でした。

指導員になって、いつまでたっても研修の場としての観察会にいつも同じメンバーで参加することに疑問が出て参りました。「たくさん指導員がいるのになぜ観察会をしないのかなって?」「いつも決まったメンバーが委託観察会に動員され、この会は動員の為の登録メンバーかなって?」そして、「観察会の本来の意味は身近な自然を四季折々に見るのではないのか」と数年前の観察会の良い点を復活しようじゃないかと言う意見が出ました。たまたま、私が定光寺に近く「大谷さんやってみたら」の一声でやることにしました。だけど、「毎月決まった日に都合をつける」「力量不足の私に何が出来るのか」など不安がいっぱいでした。スタートして半年「担当だから」と言って妻君からの家事をことわり、行って見れば、来てくれた人は一

人の時がありました。でも、車で1時間以上かかって参加してくれた人のことを考えたら何かをせねばと思いました。ある月には、父兄が子ども2人つれてやってきてくれました。あとは全部大人。それまで、大人中心の会であつたので、2人の子には申し訳ないことをしたと反省させられたこともありました。いろいろなことがあり、私なりに思考錯誤しました。私なりに考えた自分に出来る観察会のあり方をまとめてみたいと思います。

- ・観察会は、自分一人で指導するものではない。参加者みんなでやるものだ。
- ・観察会は、自然から「美しさ」「おもしろさ」「感動」などを学びとる会である。
- ・リーダーは、地域の自然環境と生物のつながりを理解し季節、年令にあったコースを日頃から調べておく。

この葉っぱは、「イロハカエデだよ」と教えても何も感動してくれません。天気の良い日に紅葉した葉が見られるところに行つて「見上げてごらん」と言う方がどれほど感動してくれるやら。「定光寺にはこんなすてきなものがあります。見に来て下さい」見てもらいたいものをゲームなどをしながら探してもらったりするのです。後は、参加者のだれかが、探し方のコツをだれかに教えてあげるのです。最近毎回10人程の一般の参加があるようになりました。指導員で参加された方は、参加者ではなく指導員になってもらっています。私は、テーマに合うと思われるところの道案内人なのです。



## 名古屋の川はどこまできれいになる？

近 藤 盛 英 (名古屋支部)

国道一号線が名古屋の堀川を渡る橋を白鳥橋と言います。私の中学生当時、人が渡るこの橋は木製で、人と車



を分けて渡していました。橋の上から覗くと真っ黒な堀川は、川っぶちに浮くたくさんの材木の隙間からもブカブカとメタンガスを発生させ、仲間内ではこの川に落ちると真っ黒になり臭いにおいが決して取れないとか、一度沈むと浮かんでこれないと言われていました。それでも少年の頃は、あのたくさんの材木の上で遊べばスリルもあってきっと楽しいだろうと思っていました。(勿論、よい子は川で遊ばないという立看板がありましたし、学校からもそうした指導を受けており、夢で終わりましたが。)

もっと昔は堀川で泳ぐことができたという話を聞きもしましたが、目の前の堀川は泳げる川にはほど遠いものでした。

この堀川は昭和37年から水質の調査が始められ、38年度小塩橋(県図書館の北西あたり)のBODは31mg/lであったものが、41年

度には5.5mg/l近くなり、その後は、下図のとおり、水質の改善が進みました。

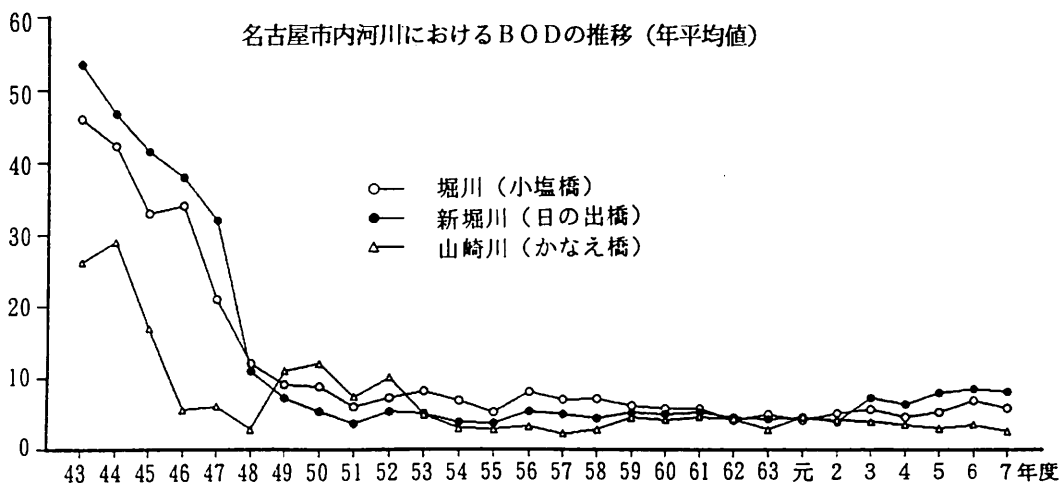
私が中学に通っていた頃(昭和40年代前半)は、最も汚れていたということがうなずけるところですが、水質の改善がどのように進み、現在はどのようなのでしょうか。

堀川の水質改善は、水質汚濁防止法等による排水規制、下水道の整備、底泥の浚渫などの対策が功を奏したと言えると思います。

今、堀川は名古屋市内の河川のうちに最もきれいな川のうちのひとつだと言われています。堀川(小塩橋)のBODは平成7年度年平均値が5.7mg/lで、BODで評価するかぎりでは名古屋市内ではきれいなほうです。堀川を見たことがある方はどう思いますか？

名古屋市内で、堀川以外の川はどうでしょうか。春、桜で有名な山崎川は、橋の上から覗けばコイが泳ぎ、堀川よりずっときれいに見えます。この川もかつては水質汚濁に悩まされましたが、平成7年度のBODは年平均値(かなえ橋)が2.5mg/lでした。この値は庄内川(大留橋)の1.5mg/lに次ぐきれいさです。

mg/l



しかし、山崎川の生物相を見てみると大層貧弱です。水源が猫ヶ洞池（千種区）にあることを考慮しても、水質から見るだけではミズムシが優占している川には思えません。

現在の水質汚濁の主要因は生活排水にあると言われています。これは名古屋市内だけのことでありません。愛知県も含め、全国の多くの河川の水質汚濁対策が生活排水対策を今後どう進めるかが課題となっています。一方で、堀川も山崎川も現在では流域の下水道は完備しています。生活排水対策を課題とするならこの2河川は対策済みということになりそうです。BODだけで評価したら確かにそのように思われます。しかし、うす黒く濁んだ堀川やミズムシが多い山崎川にきれいさを感じることができるでしょうか。問題はまだ別のところにもあるように思われます。

天白川の支川に扇川という川があります。この川は、かつては水質汚濁が進み、市内で最も汚れた川のひとつでした。この川が下水道の普及によってどのように水質が改善されたかをたどってみたいと思います。この川は流域のほとんどが緑区内ですので、区内の下水道普及率で追ってみることにします。

下表のとおり、下水道の整備に伴い着実に水質が改善されてきているのがわかります。下水処理が区内の流域人口の80%くらいになったとき、水質の改善が確認できるようになってきたと思われます。

平成7年度の扇川（鳴海橋）のBODの年平均値は3.3mg/lでした。この川の将来の水質は、さらに山崎川の水質くらいには改善されるように思えます。

また、扇川流域は山崎川と異なり分流式の下水処理区域のため、将来の生物相は山崎川より

期待が持てるように思われます。

いずれにしても、下水道の整備は河川の水質改善に大いに役立っており、水質だけで評価するなら下水道の整備によりBODは3mg/l程度までには改善されそうです。

では、名古屋市内の河川は下水道の整備により今後あらゆる川がBODは3mg/l程度になると言えるのでしょうか。

これには疑問があります。それは、名古屋市の地理的・地形的要因です。ご存じのように名古屋市は海に面した、いわば河口付近に位置しており、また、南西部がゼロメートル地帯にあることです。このことは、例えば、市の西部にある戸田川は、ポンプ排水を余儀なくされており、下水道の整備が進んでも川は溜まり水のような状況になるのではないかと思います。

（戸田川流域の生活排水などは、打出下水処理場で処理され、庄内川に排出されます。）

もうひとつ、違った課題があります。

天白川の支川に植田川があります。この川の水質を見ると、流域の下水道がほぼ整備されているにもかかわらず、未だBODが3mg/l程度まで下がってきません。（平成7年度は植田橋でBODの年平均値が6.6mg/lでした。）植田川には2つの下水処理場が放流しており、その処理水が植田川の水質に多きな影響を与えているからと考えられます。（山崎川、扇川にも下水処理場がありますが、いずれも処理場が水質調査地点より下流部にあります。）

今後、名古屋市内の河川水質の改善には、排水規制や下水道の整備だけでなく、河川や地域の特質なども考慮に入れた対応が必要になってくると思われます。

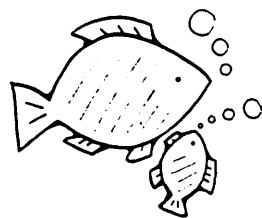


表 名古屋市緑区の下水道普及率と扇川（鳴海橋）のBODの推移

年 度	62	63	元	2	3	4	5
普及率（人口）（%）	71.6	79.8	82.5	82.8	86.3	87.5	87.6
BOD（扇川）（mg/l）	10	6.6	5.8	5.9	5.0	4.2	4.6

## 〔行事結果〕

### ★ 普及部会（第3回）

〔期日〕平成8年11月17日 14:00～16:20

〔場所〕名古屋市公会堂集会室（出席7名）

〔内容〕

#### ① 自然観察会

平成9年度の県委託観察会は、運営の面で反省点も多いので、初心に返ってきっちりとしたものを行うようにする。シリーズ観察会のテーマは、「里山」にする。

#### ② 研修会

指導員研修会として1泊の会を何か考える。  
そのほか意見交換を行う。

〔主な意見〕

- 観察会に新しい指導員が来てくれるようなものを考えたい。
- 県委託観察会では、参加者1人当たり千円位の金をかけている計算になるので、それに見合う内容にするべきではないか。
- 里山の観察会では、人との係わりなども重視する必要がある。地元の人の話を聞くとか歴史を加えることを考えてもよい。
- 自然観察指導員の会であるがら、新しいことや他ではやっていないようなことも積極的に取り組む必要がある。研修会もそれに向けたものを考えたい。

### ★ 運営・編集部会

〔期日〕平成8年12月15日 13:40～16:30

〔場所〕名古屋市公会堂集会室（出席7名）

〔内容〕

#### ① 9年度事業

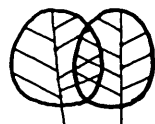
内容はおおむね8年度と同様で、自然観察会は、ふるさと観察会6回、シリーズ観察会6回を行う。運営はきっちりとしたものとする。定例観察会を含めて保険事務を協議会で行う。指導員講習会を秋に行う。

#### ② 会費の値上げ

事務局から、会費は10年来据え置いてきたが、運営が困難になってきたため、9年度から3,000円（家族会員は500円のまま）に引き上げる旨の提案があり、おおむね了承される。なお、支部でも支部会費を取っている所が増えているので、何らかの調整が今後は必要となるとの意見もあった。また、協議会の会費を支部会費とともに支部で徴収することを各支部で検討し、できる所から実施することとする。

#### ③ 機関誌の内容

意見交換を行う。



#### ④ 今後の検討課題

部会が出た意見で、今後検討を要することとして、

- ・ 協議会で作成した資料を観察会などで販売することも考えたい。
- ・ インターネットに観察会の情報提供のホームページを作ってはどうか。
- ・ 観察会のテキストのモデルを作成する。
- ・ 機関誌を綴じるファイルをつくってはどうか。

### ☆ 基礎研修会「雑木林・今むかし」

〔期日〕平成9年2月11日（出席27名）

〔場所〕中小企業センター〔講師〕鈴木隆司氏  
森林公園を中心とした尾張部の雑木林は、江戸時代中期までは松林であり、鹿狩りも行われていた。痩せた地域であり、生活燃料の採取等で、藩の山林保護施策にもかかわらず、その後にはひどい禿げ山となってしまった。知多半島でも塩作りによってかなりの禿げ山地帯となっていた。明治になってデレーケ等の指導で治山治水事業が行われ、今の緑豊かな丘陵地帯となってきたことなど、古い文書、絵図面などで考察した興味ある話が聞かれた。

## [お知らせ]

### 全国的な自然の調査について

NACS-Jと環境庁では、今年も全国的に自然の調査をそれぞれ実施します。自然観察指導員として、1カ所でも参加してくだされば、数は力なりです。ご協力ください。

#### ★「里山の自然調べ」〔NACS-J〕

一昨年の「川の自然度」、昨年の「海・湖沼の自然度」に引き続き実施されるもので、里山の自然度を調べるような感じですが、今までのものとは少し目的や方法が異なるようです。

- ・調査表：NACS-Jの機関誌「自然保護」の6月号に調査表を同封し、6月末までに調査表を回収する。

- ・6月の環境月間に里山を調べる自然観察会を行う。

(愛知県の9年のシリーズ観察会は、里山がテーマですので、6月に開かれる4回をこの対象としたいと思っています。)

#### ★「ツバメの巣調査」〔環境庁〕

身近な生き物調査として、一昨年の「セミ」昨年の「ひつつき虫」に引き続き実施されるもので、ツバメの巣の所在とその環境を調べるものです。

- ・調査員としての申込：4月末頃まで
- ・調査表が送付される：4月過ぎ
- ・調査実施期間：4～8月(期限：8月末)

(協議会では、ツバメの巣調査を会の事業として取り上げたいと思っています。協議会は調査員登録をしていますので、会を経由して調査結果を環境庁へ送ることができます。そして、愛知県のより詳しい結果を機関誌等でお知らせする予定です。一般調査とねらいを持った調査に分けて行いたいと思っています。詳しくは、次号の機関誌でお知らせします。)



### 協議会の役員について

各支部の総会も順次終わりました。各支部とも役員は昨年通りでしたので、協議会の役員は昨年と変わりありませんでした。

- ・会長：大竹 勝
- ・副会長：竹内哲也・中西 正
- ・監 事：水島富人・篠田陽作
- ・部会長 運営：佐藤國彦 普及：大谷敏和  
調査：北岡明彦 編集：近藤盛英
- ・会計：橋本 哲
- ・支部長

名古屋：浅井聡司 尾 張：松尾 初  
知 多：加藤寿芽 西三河：山原勇雄  
東三河：丸山 嵩 奥三河：石川静雄

### 〈会員の動き〉

#### 【加 入】

氏原 弘 (名古屋支部)  
454 名古屋市千種区戸田 1-3007  
岡本明子 (名古屋支部)  
464 名古屋市千種区徳川山町 3-61-1  
大久保 巖 (尾張支部)  
487 春日井市石尾台 4-8-18  
捉髪玲子 (尾張支部)  
488 尾張旭市霞ヶ丘町南 207

#### 【脱 退】

前原範四(名古屋支部) 大阪府へ転出  
武田孝夫(東三河支部)  
秋山敬子(名古屋支部)

#### 【住所変更】

高谷昌志 463 名古屋市守山区大森八龍  
2367-1053  
一柳郁夫 458 名古屋市緑区池の台 3-28  
グリーンハイツ万場山 205  
池田よし子 470-24 知多郡美浜町北方 2-68

## 行 事 案 内

### ☆「協議会総会」

期日：平成9年3月23日（日） 13:30～16:30

場所：産業貿易館（地下鉄「市役所」駅下車東南西へ徒歩10分

講演会：未定

### ☆見学会「岐阜県恵那郡のシデコブシ」（会員のみ）

期日：平成9年4月12日（土）

※土岐市の自生地等2～3カ所を見る予定です。車に乗り合わせで。

※必ず事務局（佐藤国彦）まで申し込んでください。（集合：地下鉄本郷駅前 8:00）

### ☆研究会「自然観察に使えるゲーム」（会員のみ）

期日：平成9年4月26日（土） 9:30～昼

場所：鶴舞公園（集合：名古屋市公会堂前）

講師：篠田陽作

※ 研究会といっても皆で考え合うものですので気軽に参加してください。

### ☆（予定）視察研修会「大台ヶ原」（奈良県から）（会員とその家族）

期日：平成9年5月24～25日（土日）

※大台ヶ原の周遊コース4時間位ほか。民宿に宿泊予定。

（宿泊予約のため1カ月前までに申し込んでください。）

★問合せ先：いずれも佐藤（☎05617-3-5674）まで

### 稿「自然になかアンケート」

第2回の自然に関するアンケートを行います。  
今回のテーマは『愛知県で残したい自然』です。  
ハガキに場所と理由を書いて、編集部（近藤）  
までお寄せください。締切りは、3月末としま  
す。同じ場所で複数の方がダブっても構いま  
せん。誰かが出すだろうでなく、あなたのハガキ  
をお願いします。

#### ✎ 編集後記 ✎

2月11日に、我が家の梅が花  
をつけているのに気づきました。  
最近せわしない日々を送っていた  
ためか、つぼみのふくらみにも気づかずいたようです。  
何だか複雑な気持ちとホッとする気持ちになりました。

皆様から送っていただいている原稿のストックが底をつきました。次号が予定どおり発行できる  
か心配です。アンケートも含めて、皆様の原稿をお待ちしています。（近藤）



## ＝ 目 次 ＝

近年増加著しいチョウ・トンボのこと	1
風の丘の植物盗掘記	2
近畿・東海自然観察指導員連絡会 の交流会に参加して	7
定例観察会	10
定光寺自然観察会	
名古屋の川はどこまできれいになる？	11
事務局から	13